

雨中の海棠

尾池桐陽

芳園三月雨濛濛

露染煙英漸紅放

想見華清初めて浴を出て

嬌姿力無く春風立

【作者】尾池桐陽（一七六五〜一八三四年）（明和二年〜天保五年）江戸時代中期・後期の讃岐丸亀藩医。名は槃、字は寛翁、

号して桐陽。讃岐の人。

【語釈】*雨…ここでは、春雨になる。

*濛濛…雨がけむつてふり、薄暗いさま。

*露染…露に濡れた花のズイ。露おくズイ。

*煙英雨にけむる花びら。けむれる花びら。

*漸…だんだんと。ようやく。

*放…（花が）咲く。

*想見…想ってみる。

*華清…長安東郊にある離宮。湯泉があった。*嬌姿…なまめかしい姿。*無力…力無くぐったりとしている。嫋々としたさまをいう。

【通釈】かぐわしい草花の咲いている三月の庭に、雨がけむるよう降つて薄暗く。露に濡れた花のズイと雨にけむる花弁が、だんだんと花を開かせた。楊貴妃が、華清池で浴を賜つての湯上がり時が聯想されて、艶やかでなまめかしい姿が、嫋々として春風の中に立っている。

【備考】雨中海棠…雨の中のカイドウの花。雨に濡れているカイドウの花の可憐な姿を見て、唐の玄宗に愛された楊貴妃が、華清池で浴を賜つて、

初めて寵愛を賜つた時の初々しさを聯想している。転句、結句を読んだ音調から感ずることだが、日本語ベースで作られたものにならうか。

その観点で全てをみているだけであつて、この作品は本当にすばらしいものであると思つてとりあげた。情景描写から始まるがそれだけに終わらず、潤いのある奥深い余韻のあるものとなっている。